

平成27年度 第4回豊橋市総合教育会議議事録（要録）

平成27年11月12日 開催

豊橋市教育委員会

第4回 総合教育会議	
日時	平成27年11月12日（木）午後3時30分～5時30分
場所	市役所西館7階第2委員会室
構成員	佐原 光一 市長、朝倉 由美子 教育委員長、 高橋 豊彦 教育委員長職務代理者、芳賀 亜希子 教育委員、 渡辺 嘉郎 教育委員、加藤 正俊 教育長
事務局	加藤 喜康 教育部長、金子 尚央 教育部次長、牧野 正樹 財政課長 村田 敬三 教育政策課長、中田 浩次 教育政策課主幹、 山西 正泰 学校教育課長、松井 雄一郎 保健給食課長、 森田 教義 生涯学習課長、蔵地 宏美 スポーツ課長、 天野 年雄 図書館長、三世 善徳 美術博物館副館長、 家田 健吾 科学教育センター所長、河合 幸子 市民協働推進課長 中村 一吉 自然史博物館事務長、鈴木 教仁 こども未来政策課長、 前田豊彦 こども家庭課長 ほか全21名
その他	傍聴人 0人

議 事 日 程

協議事項

豊橋市教育振興基本計画中間見直しについて

連絡事項

・次回開催日程

3月3日（木） 第5回（教育振興基本計画、大綱）

(市長)

それでは第4回目の総合教育会議を次第に従って進めます。協議事項「豊橋市教育振興基本計画中間見直しについて」です。本市の教育に関する大綱は教育振興基本計画と内容の整合をはかり今後策定していくとの方向性を定めておりますので、まずはこの場で教育振興基本計画改定版(案)について皆さんと意見交換をしたいと思います。それでは事務局から説明をして下さい。

協議事項

豊橋市教育振興基本計画中間見直しについて

■教育政策課長 協議事項について説明(別添資料)

(市長)

この報告について、ご意見などを聞かせいただきたい。

(高橋委員)

昨日、羽田中学校の人間力の研究発表会に参加して感じたことです。主権教育に関して、18歳からの選挙権のことを扱う授業があったが、この計画の中では全く触れられていない。これは今年度に入ってから動き、社会の変化だが、5年後を見据えてこのタイミングで触れた方が良いのではないか。

(事務局)

選挙権については記述していない。

(高橋委員)

昨日の授業を聞いてなるほどと思ったのは、子どもたちに「親に聞いてみたら」という発言が多かった。全体的に投票率が低い中で親が中学生を通じて少しでも関心を持つというサイクルができるか。駐車場の身障者スペースに勝手に停める対策として、警察が子どもに「ここは停めてはいけない所です」ということを徹底的にやったら一番効果があったそうだ。主権教育という言葉が良いのかは悩むが、義務教育の中で今のタイミングで触れてどう扱うか。

(市長)

主権教育はもちろんそうだが、子どもたちに社会の基本のリスクを教えることが社会を良くすることに大きな影響を与える。先ほどの駐車違反、スピード違反でもそうだし、色々な基本動作を小学校までに身に付けさせたい。しかし、学校では時間がない。海外に行って感じるのは、日本人とのその部分の差。海外での子どものしつけはすごく厳しいが、基本は学校でなく親が教える。店で欲しいものがあって、商品棚の前で泣いているのはアジアの子、ヨーロッパの子は買ってくれないと知っているからそれをしない。空港で親元を離れて走り回っているのもアジアの子。ヨーロッパの子は、人さらいに遭うと教えられて

いるから親元を離れない。基本動作のしつけを日本では親が学校に任せてしまう。危険の問題もその延長の話。社会に対する子どもの意識、社会と子どもの世界、大人の世界との違いを教える場面が日本にはない。

(高橋委員)

親子が話し合う場面が少ない、社会変化からいうとこれからもっと少なくなる。

(朝倉委員)

「そういう風にやりましょう」と前向きな親もいれば、「何を言っているんだ」と親から一喝されて何も言えず押しえつけられる子どももいる。そういう子どもに対して、「子どもが変われば親も変わる」と言ってもだめで、どうサポートしていくかが重要。

(市長)

親が変わらないというところまでは肯定するとして、では、子どもも変わらないのか。

(朝倉委員)

仮面性ですね、変わりたいという気持ちと親の前ではそういう顔をできないという面の。

(高橋委員)

私の頃にはそういう実感はなかったが、ハイティーンは、政治や社会問題に関心があるということを周りに知られたくないという意識が以前より強くある。

(教育長)

今回の学習指導要領の改訂は、高校にかなりメスを入れている。アクティブラーニングの指導法も含め、歴史の教科の改編、選挙権を18歳までに引き下げたことへの対応。高3が選挙権を持つようになると政治の中立性をどう扱っていくかについて高校現場は敏感になっている。小中学校でそれを支えていくので、児童会・生徒会の自治活動へ主体的に関わっていくことになる。そして、自分たちの生活の問題として主体的にどう関わっていく力を付けるか。

政策で言えば、基本政策1の学校教育の部分と基本政策4の子ども若者の健全育成両方に関わる。10年を見通して作った計画が5年たってちょうど見直しの時期になった。時代が変わったという現況に触れて、学校教育で言えば、時代に対応した教育の推進に触れる。子ども・若者についてどうにも気になるのが、負の部分ばかりが出て、子どもの健全育成のプラスの部分である未来の展望といった面が薄い。そこを書き込まないと何となく暗い。

(市長)

基本政策4の「子ども・若者の健全育成」には、それこそ色々なスポーツ活動や芸術文化の充実・推進も含まれており、みな健全育成。社会と触れ合い、歴史・社会を学ぶ場所を作るのも、投票に行くのもそうだし、教育長の言うように何か足りない。

(教育長)

健全育成という言葉でくくっているが、これが一番の目的。そこに向かって他が補完している構造。

(市長)

学校教育というくくりとその他の場所での健全育成というくくりの二つがある。その中に若者の健全育成やお年寄りの健全な生活の場所の確保とかがある。基本政策はそういう視点も入れて見直してみたい。

(高橋委員)

実際に中身を見ていくと、基本政策の2の「生涯学習の推進」というタイトルだが、本当はダブっていないといけない話。地域との密接さは、子ども・若者の健全育成ということで言えば、真っ先に出るはずだが構成として「生涯学習の推進」に出ている。

(市長)

どちらにも書いてあるのは、構わない。

(高橋委員)

スクールソーシャルワーカーが確保できるか、予算は取ったがその該当者がそろうかの問題がある。専門の人が必要な時に人数がそろえられず、人材不足倒産という状況が出てきている。

(市長)

豊橋でも介護施設を作ったが介護士が集まらないという事例がある。

小学校の高学年で教科担任制など専門でやって欲しい教科は、音楽、理科、図工。

(高橋委員)

その時に地域の力をどのように活用するか。

(市長)

大清水地区で理科の実験をやろうとしたら人材はすぐ集まる。自動車関連企業の退職者がたくさんいるから。退職者を活用する仕掛けをしたときに法律的な問題はどうか。

(教育長)

その人たちが免許を持っていなくても、免許を持った先生が授業を仕切るティームティーチングのアシスタントならできる。

(市長)

英語でもALTが進めるのではなく、先生が進めてALTが発音を直したり、その回答に対してこういう答え方もあるとアドバイスをしたりしている。

(教育長)

しかし、今の小学校で英語の免許を持っていない先生が英語の授業をやると、主は担任でなくてはいけないが、ややもするとALTへお任せになりがち。

(市長)

今度、小学校で英語の授業が教科化されるとどうなるのか。

(教育長)

大学の教員免許の教育課程を変える等様々な講習をやるが、ノウハウがない自治体はマンパワーが追いつかない。それまでは豊橋がやっているような形を取らざるを得ない。さらに子ども達に対し評価をしなくてはならないので大変。

(渡辺委員)

学校の体制で、事務が一人では無理があると思う。先生たちが授業に集中するには、その他の業務を担う人材を投入する必要がある。

(市長)

政策としてうたうなら学校教育の充実の部分か。教える力の強化、体制として教える力を強くする仕組み作りをする。

(教育長)

学校現場はマンパワーを一番欲している。文科省は「チーム学校」という形で教員に全部しわ寄せがいくのでなく、人を入れて教員の負担軽減をはかることを考えている。

(市長)

かつて、教育長と議論したことがある。1クラスの生徒数を40人、35人、30人と減らすのが良いのか、1クラスの人数は今のままで良いので、足りないものについて、例えば発達障害の子のサポートや教科によって専門の人を増やすのが良いのか。そこでは、「専門の人を増やす方が良い」となった。

(教育長)

議会でも、周辺の市町村の少人数学級の話が出て質問を受けたが、がんとしてそこは譲らなかった。

(渡辺委員)

何回か授業を見させていただいて、やはり40人もいると積極的に授業を受けている子と、こんなつまらない授業は受けても仕方がないという子と、授業に全くついていけない子とがどうしても出てきてしまう。40人を一緒にして授業を進めていくのは無理がある気がする。

(教育長)

最終的には教師の資質向上・力量向上に行きつくが、現実には、自然発生的に人数の少ない周辺の学校で少人数学級が成立している。

(市長)

その周辺の小人数学校では学力が高くなっているか。

(教育長)

小さなところは高く、やはりきめ細かにできることは事実。前提として全員健常児なら集団の過多の議論となるが、今はそれよりも様々な子どもが入り込んでいるため、学級を学級として機能させる、学習集団としてどうだという部分に手を入れなければ、次の議論には行けない。

(市長)

40人を35人にしても変化は見られない。20人に減らせば全然違う。徐々に減らしても効果は薄い、昔50人だった時に一気に30人にしてしまえば良かった。

(朝倉委員)

教員の報酬はどうか。県費負担とすると、クラスを増やして先生を増やすとなると、国は先生を減らそうとしているので、サポートの部分は市の予算の中で補うのか。

(教育長)

今もそう。特別支援の発達障害の支援員など。

(朝倉委員)

現場に行った時、支援員について「とても助かっています」と言われた。しかし、「もっと増やして欲しい」とも言われた。

(市長)

県からいただいている標準的な人数配分の教師の給与は、県費と県を通した国費で賄っている。それを越えた分は市町村が面倒を見ている。

(教育長)

教員を市費で採用することも法的にはできるが、人材がない。

(渡辺委員)

本当にやろうとしたら、40人学級を半分にするぐらいでやらない限り改善はできない。

(市長)

小学校で20人学級にしたら、教室をどうするかを抜きにしても、今、小中学校で正規教員が1800名程いるから、教員が数百人は増える。経費として年間一人一千万円かかるとすると数十億円。今、市の教員の人件費が年間百数十億円。市の教育予算が校舎の建築などを入れて年間百二十億円。教員は労働集約的な仕事だから人件費がどうしても重い。医療も一緒だが、教師を一人育てるのに費用がかかるのでその供給量が増えてこない。また、増やして質の保証ができるか。今、大学へ行く人数は1学年百万人で固定しているが、今後は減ってくるだろう。今年生まれる子どもは百万人を切るだろうと言われている。

(渡辺委員)

経済界で働く人も減ってくるかもしれないが、教育ということで雇用を促進していく必要も出てくる。教育は市の中で一番基本的なところ。もちろん経済も大切だが、そこがしっかりしないとこれから豊橋がどうなっていくか非常に不安。

(高橋委員)

「教員になりたいなら豊橋市に住みましょう」という環境を作っていくことも大事。

(市長)

「教員になりたいなら豊橋市で子どもを育てましょう」。しかし、所詮それは都市間競争の奪い合いに過ぎない。周辺地域の子どもを0にして子育ては全部豊橋にして良いか。東京周辺ではそういう競争はすでに始まっている。「母になるなら、流山市」の働きかけで実際に流山市の子育て世代の人口が増えている。

(芳賀委員)

今回保育料をぐっと下げて入りやすくしている自治体もある。

(市長)

新城市でもそれをしている。新東名の開通で岡崎や豊田から新城に移ってくるかもしれないが、それは奪い合い。目指したいことの一つは、豊橋や周辺に住んでいたら子どもの教育も安心してでき、そこそこ皆が頑張れば良い大学に行け、そのまま地元の優良企業に勤められますという環境を作ること。

(渡辺委員)

豊橋も人口が減っているし、子どももどんどん減っているから、手を打つ必要がある。

(市長)

でも、困るのは豊橋が手を打つと北設楽が影響を受ける。皆が同じように良い環境を作って、高校までしっかり勉強をできたら、その先は自分の頑張りの度合いにもよるが、しっかり就職まで面倒みるよ。そのために、35人学級をやるとすると教室が足りなくなる学校がいっぱいできてしまう。校区の再編をしないとならない。福岡、栄、幸校区はあと2、3年でピークを迎え、その後急激に減る。汐田は区画整理をしている。吉田方、牟呂、汐田が減らない。東側はある程度飽和状態、牛川はどうなるか分からない。そんなに大変なところはなくなる。岩田も解消し始めて急激に減り、放っておいても30人学級になってしまう。

(朝倉委員)

校区の再編は、「たかだか9年間の義務教育のために移せるか」と、どうやっても動かないという所もある。

(市長)

お宮さん、お祭り、町内会、と色々なしがらみにはばまれる。その時大事なことが、子どもたちのこと。子どもと一緒にあって親が地域で学ぶことで、子どもたちが学び育つ良い環境を作る。お年寄りには寝た切りの人を減らして、健康なお年寄りを増やす。そうやって頑張れば子どもたちに色々な手当が行き、子どもたちも住みやすい環境になる。そこにつながるシナリオにしたい。

先生を増やすというのもクラス数を増やせない現状がある。正規の先生を増やせないなら、サポートの体制で頑張れるか。アシスタントの先生なら、先生OBなど沢山の人材の中からチョイスして、ある程度人数を確保できる。それで70歳までやりがいを持って元気に働いてもらう。

授業でも余裕で遊んでいる子もいれば、ついていけない子もいる。それに合った教育ができる環境を同じクラスの中でも作れたら良い。

(朝倉委員)

塾の方がやった感があるからと、就職で教員でなくそちらに行く人もいる。

(市長)

塾の方が要領よく覚えられ良い点が取れるとして、塾の指導手法を学校教育に持ち込んでいる町がある。塾の先生に学校の先生の授業を見てもらいアドバイスをもらっている。我々は塾との付き合い方をどのようにするのが良いか学校教育課に検討をお願いしている。

(教育長)

塾関係者が来たときに、高校進学をする生徒の塾講師への最後の作文を見せてもらい、ショックを受けた。塾の先生に対するすごい尊敬と感謝の気持ちが綴られていた。すると学校の存在感はどこにあるのか。高校受験も、これからは変わってくるのだろうが、客観性を求めるとなると知識の部分が重視された入試になる。それを塾と学校といった時、子どもの直接的なニーズはまだ塾にある。本来の学校の存在感は、それだけではない。集団で学び活動をする中で様々なことを学ぶ場は塾にはないもの。

(高橋委員)

学校の先生の基本的なスキルが劣っているとは思わない。塾の先生は、教えることに時間も集中できているから、マンパワーとしてそこで生きているのはすごく大きな差か。

(教育長)

私たちが、現場の最前線で授業をしていた時、昭和 50 年代の高度経済成長時は先が予測できていた。大学へ行けば優良企業に入り、終身雇用で将来の安定が見えていたので、親も子どもへの教育投資を考え、そういう価値観を共有していた。子どもも高校は進学校に行きたいという目標を持っていた。すると指導はどうであっても点数が取れば我慢できる。学力観が違っている。当時は中統テストがあり、点数を取らすため徹底指導をしていた。それに親も生徒もニーズがあった。

今は、平成に入り時代が変わって、創造力、判断力、考える力をどう付けるかと学力観の転換が行われてきた。学力観が違えば指導法が違ってくる。結局は問題解決的な授業に転換していく。しかし、入試に捉われない小学校は対応が早い、中学校は理念は分かるが入試が変わらないため、なかなか指導法は変わらない。

(渡辺委員)

塾は一定の学力の子が来ており、目標もそろっている、授業はしやすい。学校の先生は色々なレベルの子を相手にしなくてはならない。塾の方が勉強に特化して教えられる。学校ではほっとかかれている上位の子の興味を塾では満たしてくれる。そういう意味で感謝されるかもしれない。

(芳賀委員)

今の塾は、上位もそうだが、少し下ぐらいの子をものすごく伸ばす。頑張りすぎて上級学校に行くと、つらくなる子も増えている。大学に苦勞して入っても余力がないという子を見ている。長い目で見て、塾で頑張れば頑張るほど大丈夫かなと感じる。高校でもしんどくて心が折れるということもある。良い意味で、昔は、やる子は自分でやっていて、ばらばらの中で良くも悪くもやっていたのが、いい意味で歩調がそろいすぎている。

(市長)

昔は個性を認め、数学や物理はできるが歴史は全く駄目だということを平気で許していた。皆が同じようにできなくてはいけないとは生徒も思っていなかったし、先生にもどっちみちできないからと相手にされなかった。

(渡辺委員)

市の職員を選ぶのも、伸びきった子を成績だけで選ぶとまずい、そういう意味ですね。

(市長)

それこそ、心が折れてしまうとまずい。学校も「個性豊かな」とあり、個に応じた教育とつながるが、20人、30人で一人ずつの面倒をしっかりと見られるか。

(渡辺委員)

うわべだけの知識・学力でなく、本当の生きる力である学力を学校で付けることが大事。

(教育長)

基本政策4の「子ども・若者の健全育成」の部門の計画である「とよはし子ども・若者育成プラン」の中にプラス面のことをしっかり書き込んであるか。

(事務局)

基本的な柱の1として「青少年健全育成活動の支援・推進」を掲げ、その1として、「子ども・若者の健やかな成長と自立に向けた支援の充実」があり、項目として4つを挙げている。「豊かな心と健やかな体の育成」、「社会の変化に対応できる力の育成」、「子ども・若者の自立をはぐくむ多様な交流」、「少年非行の防止」。

(教育長)

言葉はそう書いてあるが、ケアーの部分が表に出すぎていないか。プラスの部分について、子どもの健全育成という視点で具体的な政策を進めていくところまで育成プランの中で記述してあるか。

(教育長)

取組みの基本方針の(1)の「青少年健全育成活動の支援・推進」が光の部分だが、どこへ行ってしまったのか。「そのために」というつなぎ言葉で何をやるのかなと読むと、少年愛護センターを中心とした非行防止に入っていく。こちらが主では困る。

(市長)

10人子どもがいて2人はお世話になる子がいても良いが、残りの8人がどう頑張るのかということが書いてない。

(芳賀委員)

体験する所がない。この放課後児童というともっと小さい。中学生とか高校生が自分の力を伸ばすところが必要。

(市長)

中学生、高校生、大学生に対しては、サイエンスコアにラボを作ったので、そこに行っ、女の子は家庭で使うものを作ってみよう、男の子は遊び道具を作ってみよう、そうこうしているうちに大学に行ってみようとなることを期待している。光のあたる、将来活躍してもらいたい場所を提供しているが、触れられていない。音楽をやりたい子を集めてプラットの中に楽団を作ろう、演劇をやるためのキャリアを積んでいくことも進めているが、そういう健全な成長が書かれていない。

(教育長)

基本政策4の「子ども・若者の健全育成」でいうと、5年後の目標とする姿に「地域とともに見守り支援する体制が構築され」とある。そういう体制の中で子どもが健やかに育つことをイメージした時に、構築される部分の具体的な取組みがないと5年間何をやって行くのかが分からない。

(市長)

健全育成という言葉が、「非行に走らないようにする」にこだわりすぎている。

(渡辺委員)

本来、健全育成というのはそういう意味。自治会でも健全育成委員会というのは非行を予防するための会を、そうは書けないので健全育成と言っている。学校教育の推進のところにも他の子どもたちのことは書いてある。

(市長)

そうすると、学校教育のところはどこまで、生涯教育はどこからか。

(教育長)

最後は大綱として市民にメッセージとしてコンパクトに送るときが大切。

学校教育では地域教育ボランティア制度という仕掛けを導入して4、5年になる。学校教育の中に入れたが、最終的には「子どもの健全育成」というキーワードは、地域力の活用、地域ぐるみの教育のシステムをそれぞれの中で作り上げていくという取組みに踏みださない限りは言葉遊びで終わってしまう。

(渡辺委員)

一般の若者の非行防止だけでないところを書いていく。

(市長)

「健やかな成長」をどう読むかということ。

(教育長)

全部が構造的にからんでくる。生涯学習が大清水のミナクルで動き出すが、様々な体験を地域力を生かしてやっていく動きも健全育成ということにつながっていく。健全育成ということについてしっかり書き込んだ方が良い。

(高橋委員)

体験の場面でつなぐ仕組み、その場面がどこにあるか、仕掛けはどうやっていったらよいか。羽田中の生徒が自分たちの行っていた羽根井小の土曜日学校などを改めて見た時に、「僕たち手伝えるんじゃないの」という意見が出ていた。どこかで経験として触れないとそうはならない。それを「どうしようか」と言ったときに、「つないであげるわ」という人がいることによってつながる。その一方で、今の子は言われたことしかやらないので、うまくやる必要がある。

(市長)

常識的な範囲で、日のあたる部分も健やかに伸びて欲しい。整理してみよう。

(事務局)

もともと「子ども・若者育成プラン」のところは、陰の部分ともう一つ青少年教育が入って二つあった。それを今度、青少年教育を生涯学習プランの方へ持って行ったので非行防止の色が濃くなってしまった。調整をしたいと思います。

(渡辺委員)

基本政策1「学校教育の推進」のプラン1-2「いのちを尊び、自他を慈しむ豊かな心の育成」について、学校教育は集団で皆が一緒のことをやれるようにすることも目標の一つ。しかし、皆と一緒にできないといけなくて教え込んでしまうという悪い面もある。今、いじめとか不登校の問題が起きているが、皆顔も名前も違うように違うのが当たり前で、そこを子どもたちに知ってもらうことが大事。私たちが、自由主義の世界で自由に暮らしていく根拠は規範を持っていること。もう一つは道德教育をしっかり教えていくこと。ここに「道德教育と人権教育を推進」と書いてあり、取組みの目標は「不登校を減らす」とだけ書いてある。本当はそのところをしっかりふくらませて、子どもたちに規範意識、道德を教える必要がある。それが、いじめ不登校につながっていく。また、一人ひとりの人権にも関わる。これから大人になって、自由に暮らしていくには規範意識や道德心を身につけることは、算数や英語ができることよりよほど大事。それをしっかり教えていくのは、塾ではできない学校教育の一番大切なところ。そこを膨らませて欲しい。

(教育長)

それが、昨日、羽田中でやった「人間教育」。

(高橋委員)

キーワードとして、「違いを認める多様性」。人間は分かりあえると思っている人の方が無茶、無理を言う。

(渡辺委員)

分かりあえるというのは難しい問題。

(高橋委員)

学校教育では「ごめんなさい」と言いなさい、「ごめんなさい」と言うと許してくれるとアウトプットする。一番は、違うということを認知できないと、「何で分かってくれないんだ」と思ってしまう。人と違うことに対して怖がってしまっていると感じる。

(市長)

違うことだらけだが、これはありがたかったと受け止め方にリアクションがないと、自分がやったことが良かったのかどうかが分からない。私が海外で経験したことで、「可愛いね」と小さな子の頭をなでようとして殴られそうになった。やってはいけないことだということは、自分は善意でも叱られて覚える。中には逆に怒ってしまう人もいるが、なでてはいけない、大事なところだから触れてはいけないという文化。

道德については書いてあるが、多様性に対する理解については書いてない。それは外国人とのことでなくとも、日本人の中でも足の速い人もいれば遅い人もいる。それは、その

子の個性で、それを理解できるか。心を育てるのに大事なこと。

(渡辺委員)

学校と言う集団の中でいじめは必ずある。お互いを認め合わない限り起こる。そこを、皆がお互いを認め合うということを教えられるか。

(市長)

今は、「陰湿ないじめはやめましょう」というような感じになっている。いじめそのものが完璧に否定されないままきている。

(渡辺委員)

子どもの頃、いじめがあるのは当たり前と思っていた。いじめっ子はいた。今はいじめっ子という言葉が言えない。

(芳賀委員)

規範意識も、いじめ、不登校も、つながるのは、自分を認めてくれるという絶対的なものがない子がそちらに進んで行く可能性が高い。色々な違いを先生方が認めてくれていると子どもたちも余裕が出る。

(市長)

一人ひとりを大切にするという教育を書き込んでもらいましょう。

(渡辺委員)

命を持った一人の人間として尊重されるべきで、人権にもつながっていく。

(市長)

市立豊橋高校に行くと良く分かる。自分がここにいて良いんだと認められて勉強して頑張る気になった、毎年何人かから聞く。そういうときの親は涙を流して卒業を喜んでいる。

(高橋委員)

先日、虐待の加害者は自身に無力感を持っている、無力感を充足させるために虐待に走るというケースが非常に多いと聞いた。

(渡辺委員)

犯罪者は自己肯定感がなく、自分に自信がない場合が多い。だから自信を持つようにしなければいけないし、ここを大切にすることも教えていかななくてはならない。

(芳賀委員)

幼保小の連携に関連して、『幼児教育の経済学』という本によれば、自己肯定感は小学校ではなく本当は幼保のところから作っていくので、そこからやっておいた方が経済的にも学力に関しても良いとある。

(高橋委員)

基本的な自己肯定感や規範意識は、幼保、義務教育だけでなく、幼児教育から高等教育まで一貫して教育が必要であるという記述はできるか。

(渡辺委員)

幼保というと教育委員会との関係はどうなのか。

(市長)

幼稚園は教育委員会と関係ある。保育園は、今豊橋市では子ども未来部で所管している。豊橋市では保育園に頼っている比率が高いから保育課の方に幼稚園も入れてた。行政体系上で言うと幼稚園は学校の中だが保育園は生活扶助。

(渡辺委員)

依存という問題があり、赤ちゃんの時にお母さんに100%しっかり依存できているかで、その後、他人を信用できるかに影響を与える。依存の発達ができているかは非常に大事。

(市長)

少子化対策の時に、市長会で乳児保育の充実を検討していて、女性市長が全員反対した。乳児を預かる体制なんか知らない、乳児を母親がしっかり見られる体制の方がよっぽど大事だと。育休を取ったことがキャリアアップの一つのステイタスになるような社会を作ることが大事だと。

(渡辺委員)

依存症になる人は、赤ちゃんの時にお母さんにしっかり抱き抱えられていない。依存することができていないので、物質に求めたり、お酒におぼれたり、ギャンブルや薬物に走ったりしてしまう。

(芳賀委員)

そういう意味でも就学前教育は絶対落として欲しくない。

(市長)

0歳児の時、母親は仕事を休んでも、もちろんお父さんにも協力してもらって、そこで親が得られる経験、知識、知恵はどこかの職場に持って帰っても役に立つはず。そういう理解をして欲しいと言っている女性市長がいた。

(高橋委員)

出産、子育てはキャリアであると言われる。しかし、24時間、365日、核家族の中で、しかもご主人の理解を得られず、近所との交流もなく、そこで親が孤立してしまうことがある。子どもとしっかり向き合うための人によって合う方法がある。母親にも色々な人がいて、意外と女性の方が「女性はこうあるべきだ」と言ってしまうことがある。

(市長)

色々なシチュエーションがあっても、そこにお母さんの存在があればいい。お母さんが煩わしいから預けるとなつてはいけない。託児所が併設されている、病弱の子を見る施設が併設されているというような色々なパターンがあつてお母さんが最適な手法を選択できる環境があればいい。

(朝倉委員)

母親が外へ出られるといいが、外へ出られなくなってストレスがたまると虐待につながることもある。「こども未来館ここにこ」に行って、子どもがほかの子と遊んでいる中で、ストレスがたまつた母親が、他のお母さんと話ができて少し息抜きができる部分。もう一

方で、職場に早く復帰したいから預かってもらえるというどちらの選択もできる環境を整えることが必要。

(渡辺委員)

大人の事情はいっぱいあるが、子どもを育てることが大事。おっばいを上げられるのはお母さんなので、最初はお母さんですが、そこからはお父さんであっても良い。

(芳賀委員)

甘えられるものがあれば良い、それをなくしてはいけない。

(朝倉委員)

一番子どもの心が育つ幼児期の部分の記述がもう少し欲しい。

(芳賀委員)

おばあちゃん、おじいちゃんをもっと活用できると良い。

(渡辺委員)

近所のおせっかいなおばちゃんたちがいなくなって、お見合いが減ったことは若者が結婚しない一つの原因となっている。おせっかいに参加できる環境があれば喜んでおせっかいをやく人は沢山いる。

若者は、一人が気楽かもしれない。でも、人はお互いが依存していかないと暮らしていけないことを教育で教えていくべき。

(市長)

それでは、特になければここでいったん閉じます。健全育成の部分については、事務局で修正をしてその部分が分かるようにして委員の皆さんにご紹介していただきたいと思えます。

(事務局)

来週の教育委員会定例会でお示しできると思います。

連絡事項

- ・ 次回開催日程

平成28年3月3日(木) 午後4時から市役所西館7階第2委員会室